近代日本語の諸相の成立

亀井孝

（本稿は、本年五月二十九日、京都大学において開かれた第八回国語学会〔京都〕研究発表会において、みぎの題で行はれた講演の内容の要約である。わたくしへの依頼は、その時の主題「古代語から近代語へ」にいつて、音韻とか文法とかに偏らない総括的なはなしをとのことであった。じつは、学会での発表のもち時間は、なるべく短い方がよいと、わたくしは、かねがね考へてゐる。しかし、注文が注文だったので、もち時間のわくの中で具体的な実例にわたるはなしをすることは、ほとんど不可能であった。その点では、羊頭狗肉のそしりを甘受していい。ただし、わたくしの雑駁なはなしも、主旨だけは、なにらかの形で古代語から近代語へといふ主題に応へようとしたものであることを、読者が諒とせられれば幸せである。わたくしのうけとった印象では、金田一春彦氏以外の発表者は、主題に対して、さして忠実ではなかったとおもはれる。）

「古代語から近代語へ」といふばあひ、われわれは、そこに暗黙のうちに変化の起ってゐることを前提してゐる。しかし、日本語のばあひには、古代から近代へかけて変化してゐない部分も、いな、根本においては、変化してゐない部分の方が多い。元来、古代語から近代語へといふ問題は、変化したものについて、それがどのやうに変化したか、なぜそのやうに変化したか、を考へることであるかぎり、変化しないものの方は、それ自体としては問題にならないわけであるが、変化したものだけを個々に取上げることと、変化したものを変化しないものとの対立で考へるのとでは、問題のとらへ方がちがふ。ここに、逆説的ではあるが、古代語から近代語へといふ問題を、なには変化しなかったかといふ面から、却って明かにするみちがあると考へられる。

たとへば、日本語には、今日、語の統一をたもつ契機として、強さのアクセントが機能してゐるとわたくしは考へてゐる。このやうな強さのアクセントは、高さのアクセントのばあひと異り、語の意義分化に参与しないところから、資料的にはその存在を過去にさかのぼってたしかめることがほとんど不可能であるが、古代においても存在はしたとおもふ。ただし、強さのアクセントが

高さのアクセントの機能をうばふやうな事件は決して起らなかった。古代アクセントから近代アクセントへの展開は、高さのアクセントの内部でのはなしにすぎない。これに反し、かって古代印欧語では、高さのアクセントが、支配的であったのであるが、近代印欧諸語では、強さのアクセントが支配的な地位を占めるに至ってゐる。

また、音韻体系についてみてみるに、日本語が開音節を原理としてゐることは、あまねく人の知るところである。しかるに、つとに平安時代に発生した撥音と促音とは、古代語の特質を崩したかのごとくである。けれども、撥音のみならず促音の発生さへ、音節の構造において、閉音節の発生を意味するものではない。ついでながら、わたくしは、撥音および促音をも、音節組織の構造からみれば、それぞれ広義における母音とみられると解釈してゐる。促音は、あらゆる他の母音（撥音をもふくめて）に、ひびき（sonority）の有無で対立する一種の母音である。（それは自身一個で、いはゆるモーラを形作ることのできる音韻をすべて母音、さうでない音韻をすべて子音とみなしたい。）

習慣的に文法上の変化として取扱はれてゐるもののうち、真に形態論的な変化は、もっぱら用言の領域に属する。文法範疇としての名詞自体については、何らの変化も、古代から近代に至るまで起ってゐない。これは、一つには、日本語の構造にもとづく。古代印欧語のやうな高度に文法的な言語では、類推による淘汰によって、形態の多様性が単純化されてゆく傾向がみられる。大ざっぱに言って、日本語は、記憶の負担の軽い、類推を大幅にはたらかしうる言語である。いはば、淘汰の余地がない、少ないのである。形態論的変化が日本語で用言に関する現象に集中してゐることは偶然でない。しかし、それでさへ、印欧語に比べれば、決してはなはだしくはない。これは、やはり、用言の活用体系そのもののさして複雑でないところからくるものと解される。日本語の文法の変遷が、比較的単純なのは、ある程度日本語の文法そのものが比較的単純なせゐなのである。しかし、もし、日本語がその変化の面において保守的であるといひうるとすれば、それには文化史的要因がはたらいてゐると解される。ここには、これに関して、単に、琉球語が全体として本土方言よりいかに急進的に変化してゐるかを指摘するに止めておかう。日本は、その文化的統一に対する歴史的意識を、過去のいかなる社会的政治的動乱によっても根本的には変革されることなしに持続してきた。かかる意識の支配し来った社会において、そこに行はれる言語の伝統が、かかる意識の統一を媒介するために、保守的に守られたとしても、不思議ではないであろう。（註）

語形についていへば近代英語の単音節的傾向（monosyllabism）が、古代英語のいちじるしい変革の結集であるのと異り、日本語は、古代と近代を問はず、根本において二音節的である。

総じて、英語が古代語から近代語へかけて、構造的にその性格を一変してしまったやうな変革は、日本語には、みられない。

しからば、古代語から近代語への歴史的展開として、なにが数へられるか。これには、あたらしい文体としての近代日本語の成立と、表現に関する選択の自由の増大とが指摘できる。近代日本語の諸相の成立は、それが音韻現象であれ、文法現象であれ、す

べて、古代語に近代語が取って代ってゆく。新しい口語的表現の確立過程なのである。選択には、価値判断が伴ふ。時間の流れに沿って起る個々の現象の変化に対して、社会が積極的な取捨選択を加へるとき、そこに、規範の交替が起る。したがって、国語史は、文体史として把へられる。口語の文体として、近代日本語の諸相が社会的に成立したのは、概括的にいへば、結局のところ、室町時代末期から江戸時代初期へかけてであらう。

表現に関する選択の自由には、いろいろの問題がある。たとへば、敬語表現の発達や漢語の浸透のごときは、すべて、日本語に文体論的な表現のはばを賦与するもととなってゐる。

さらに、また、視野を変へれば、格助詞の体系の整備や種々の接続助詞の発達は論理の明晰を主とする文体の確立として把へられる。

さて、文体は、元来、表現に関する問題であるが、体系としての言語は、世界をいかに把握し、それに意味づけを行ふかといふ世界の把握の型の総体である。この面から近代語の特徴を考へるときにも、いろいろの問題がある。むろん、格助詞の体系の整備や接続助詞の発達は、近代日本語の体系のもつ特徴として把へられる。ここには、古代語の特質の消失といふ消極的な例を挙げよう。たとへば非現実の仮定の表現形式「ましかば…まし」が消失したことは、英語においてサヴジャンクティヴが、また、度合の差はあれ、ドイツ語においてコンユンクティーフが、口語においてそれぞれ避けられる傾向と比較して興味が多いし、同じ意味で、過去と完了との区別が廃棄されたことも、フランス語やドイツ語で口語には過去を用ゐなくなってゐることと比較するとき、これまた、興味ある現象である。

文体が表現の問題、つまり、主体の価値判断にもとづく選択の問題であるなら、この選択において相関関係に立つところの項を類型的に対立せしめるとき、性格の比較の問題がここに出てくる。これは、言語の特質の研究として、いままでも、散漫な形では取扱はれてきたものであるが、その面から古代語から近代語への展開を、言語の型の転換の問題としてみなほしてみることもできる。

(註) この文法に関する部分は、すでに、わたくしが別の機会において述べたところの趣旨を、そのまま、ここに利用した。詳しくは、拙稿 Über den Hintergrund der japanischen Sprache und ihrer Wissenschaftlichen Betrachtung (Nachrichten von der Ostasiatsichen Gesellschaft, Nr. 75 1954)参照。

—一橋大学教授—